

# ROLES REPORT

No.18

## ユーラシア主義の 歴史的・地域的展開

乗松亨平

(東京大学総合文化研究科准教授)

2022.3



ROLES REPORT\_No.18

# ユーラシア主義の歴史的・地域的展開

乗松亨平 (東京大学総合文化研究科准教授)

2022.3

発行所 東京大学先端科学技術研究センター  
創発戦略研究オープンラボ (ROLES)

〒153-8904  
東京都目黒区駒場4-6-1

Tel 03-5452-5462

Webサイト <https://roles.rcast.u-tokyo.ac.jp/>

ISBN978-4-910833-01-9



東京大学 先端科学技術研究センター  
Research Center for Advanced Science and Technology  
The University of Tokyo



左/タタルスタン カザン・クレムリン(アフロ) 右/カザフスタン(アフロ)

本稿では、旧ソ連およびその周辺で権威主義的な体制をとっている国々において、しばしば体制を支えるイデオロギーとして利用されている、ユーラシア主義の歴史的・地理的展開を概観する。最初に断っておくと、筆者の関心はユーラシア主義を含むロシア・ナショナリズムの思想史的検討にあり、リアルポリティクスとの関わりは専門としていない。本稿の内容は、思想史的検討のための背景整理にとどまる。ユーラシア主義がロシアの外交政策、とりわけその地政学的な勢力圏構想に与えている(かもしれない)影響については、日本語でも多くが書かれている一方で、ロシア以外の地域での展開についてはあまり知られていない。本稿ではその点について、おもに英語圏の研究に依拠してまとめる。

## 1. ロシアの二つのナショナリズム<sup>1</sup>

ロシアのナショナリズムは二つのタイプに大別される。これは、ロシア語で「ロシア人」を表すのに、二つの単語が存在することに対応している。一つはロシア国民、つまりロシア連邦の国籍をもつ者全般を指す「ロシースキー(российский)」「(あるいは「ロシヤニン(россиянин)」)、もう一つは民族上のロシア人を指す「ルースキー(русский)」である。ロシアは多民族国家であるから、「ロシースキー」は「ルースキー」以外のさまざまな民族を含む一方、「ルースキー」はロシア連邦以外の国家にも居住し、その国の国籍をもっている場合もある。このどちらを主体と考えるかによって、ロシアのナショナリズムは帝國的ナショナリズムとロシア民族主義という二つのタイプに分かれる。

この二つは、帝政期・ソヴィエト期・ソ連崩壊後をとおして、ときに鋭く対立してきた。ソヴィエト期には、「ソ連人」という概念が「ロシースキー」の上位互換となり、マルクス・レーニン主義が多民族の統合理念の役目を果たしたが、一方で、ロシア民族はソ連の「諸民族の長兄」と位置づけられ、第二次世界大戦では戦意高揚のためにロシア民族主義が利用された。後期ソ連では他民族のナショナリズムとともにロシア民族主義も強まり、ソ連崩壊の一因となる。そんななか、マルクス・レーニン主義に代わる、多民族統合のイデオロギーとして注目されたのが、ユーラシア主義だといわれる。

帝國的ナショナリズムとロシア民族主義は、それぞれ別個に存在するというよりは、相互の対立関係を通じて維

<sup>1</sup> 本節の内容について詳しくは、乗松亨平「敗者の(ポスト)モダン」『ゲンロン6』、2017年、54-75頁。

持されている。後期ソ連以降のロシア民族主義の要点は、一言でいえば、ロシアの多民族性の拒否にある。ロシア連邦において多数を占めるロシア民族は支配者などではなく、じつはほかの諸民族の利益のために犠牲にされてきた、という被害者史観がしばしば唱えられ、ユダヤ人や、近年では中央アジアやコーカサスからの移民が、ロシア民族を搾取していると非難される。

このような主張に際し、欧米の新右翼と同様に、近年のロシア民族主義者はしばしば民主主義のレトリックを用いる。多数派であるロシア民族がないがしろにされるのは、ロシアにおける民主主義の不全のせいであるとされ、ロシア民族を主体とする近代的ネーションステートの建設を謳って、政権批判を展開するのである。ナショナリスト・デモクラシー(националистическая демократия)を略して「ナツデム」と呼ばれるこの派閥は、不人気のリベラルを凌ぎ、現代ロシアで最大の反体制勢力となっている。さらにナツデムの一部は、民主主義のレトリックを介して、本来相容れないはずのリベラルとの融合を進めた。その代表者が、毒殺未遂事件や逮捕が日本でも大きく報道された、アレクセイ・ナワリヌイである。逆にリベラルの一部も、民族主義への歩み寄りをみせている。

それに対して帝國的ナショナリズムは、多民族性を包摂する混濁性こそロシアの本質であると考えられる。ソ連末期から1990年代にかけて、そうした帝國的ナショナリズムは危機に陥った。先に触れたように、ソ連崩壊の一因は民族主義の高まりにあり、ソ連崩壊後のロシア連邦でも、チェチェン紛争に代表されるように、諸民族の分離・独立志向が高まった。プーチンは、強力な中央集権体制の再建によってその流れを食い止めるとともに、旧ソ連地域の再統合に乗り出す。その際、特定の民族ではなく地域を指す「ユーラシア」は多民族統合の旗印として好適で、ユーラシア経済共同体(2000年)、ユーラシア関税同盟(2010年)、ユーラシア経済同盟(2015年)といった経済ブロックの呼称に採用されてきた。

第二次世界大戦の勝利の称揚など、ナショナリズムを国内統合の基盤とするプーチン政権にとって、ロシアのナショナリズムが抱えるこの分裂は宿痾である。人口の8割以上を占める「ルースキー」にはロシア民族主義が訴求力をもつが、それは「ロシースキー」を解体に導きかねない。ウクライナがプーチン政権にとってもつ重要性(あるいは有用性)を、この点から理解することもできるだろう。ロシアと同根の「兄弟民族」とみなされるウクライナは、旧ソ連圏の再統合を志向する帝國的ナショナリズムのみならず、ロシア民族主義の観点からも、一体性を維持すべき対象である。そのため、たとえばナワリヌイも、クリミア併合に際しては、併合自体ではなく武力を用いたそのやり方を批判するという反応にならざるをえなかった。2014年のウクライナ危機は政権に、ロシアのナショナリズムが抱える分裂を超えて、支持を調達することを可能にした(2022年のウクライナ危機が同様の効果をもつかは、同年2月末の現時点ではまだわからない)。さらに、「ルースキー」をロシア民族以外のロシア語話者にまで拡大しうる「ロシア世界」という概念によって、プーチン政権は二つのナショナリズムの両立を図っている。

## 2. ユーラシア主義の歴史的展開

ユーラシア主義は、1920-30年代に革命を逃れて亡命したロシア出身の知識人によって発案されたが、その源流はさらにさかのぼることができる。なかでも有名な例は、作家のドストエフスキーのプーシキン像除幕式講演(1880年)で、ロシア人の特徴は全世界の民族と共鳴できる能力にあり、ロシア人であることは「全人」であること、あらゆる人間であることなのだとして主張した。こうした混濁性と寛容さにこそ、ロシアのナショナル・アイデンティティがあ

るという考え方が、ユーラシア主義にも受け継がれる。ユーラシア主義者によれば、ロシア文化の起源はヨーロッパではなく、ロシアを一時期支配したモンゴルなど、中央ユーラシアの遊牧民族にある。その一方でキリスト教を受け入れもしたロシアは、西洋と東洋の架け橋となりつつ、多様なユーラシアを統合する盟主となる使命を帯びている、というのである。

思想的にみれば、ユーラシア主義は、戦間期のヨーロッパに現れた西洋近代批判の潮流の一つであり、資本主義とも共産主義とも異なる「第三の道」の模索において、ファシズムなどと背景を同じくしている。一方で、ユーラシアを基盤に西洋近代への対抗を図るという点で、ユーラシア主義の目指すところはソ連と重なりもする。ユーラシア主義運動は1930年代に、親ソ派と反ソ派に分裂して崩壊し、その後は忘れられていった。

それを後期ソ連で再発見し、「新ユーラシア主義」の開祖とされるのが、中世ロシア史家のレフ・グミリョフ(1912-92)である。グミリョフはユーラシア主義者と同様に、ロシア文化の起源は中世の中央ユーラシアにあると考えた。スターリン期に長いあいだを強制収容所で過ごした彼は、出所後もソ連の学界のメインストリームには受け入れられなかったが、ペレストロイカ期に一躍脚光を浴びる。民族問題への関心が高まるなか、彼の特異な民族(エトノス)理論が衆目を引くとともに、先述した民族分離主義の高まりに対して、それに反発するソ連維持勢力が、多民族を統合する理念としてユーラシア主義に注目した。

グミリョフのエトノス理論には、ユーラシア主義だけでなく、シュペングラーの比較文明論やヘッケルに代表される一元論など、二〇世紀初頭から戦間期にかけての西洋近代批判の影響がさまざまに認められる。彼はエトノスを一つの生命体として捉え、誕生から成長、老化、死に至るまでのサイクルを描く。エトノスのそうした成長サイクルの原動力となるのが、グミリョフが「熱情性」と呼ぶ謎のエネルギーであり、これは宇宙から地球にごくまれに照射される強力な宇宙線によってもたらされるとされる。ユーラシア大陸はこれまでの人類史上で9回その宇宙線の照射を受け、ロシア民族はその最後、13世紀にバルトから東アフリカにかけての地域に照射した宇宙線によって生まれたという。この照射を受けた地域では、エネルギーに満ちた「熱情者」と呼ばれる人間が多数生まれ、新たな民族の誕生を導くというのがグミリョフの理論である。これは突拍子もない議論に聞こえるだろうが、しかしロシアやその周辺地域では、グミリョフの著作はロングセラーとなって広く受け入れられ、プーチンもくりかえし言及している。シュペングラーにせよヘッケルにせよ、突拍子のなさにおいては引けをとらない。第二次世界大戦でいったんは頓挫したこうした西洋近代批判の系譜が、実際には根強く生き残ってきたことに、思想史研究は向き合わなければならない。

グミリョフが1992年に死去したあと、ロシアでは多くの論者が新ユーラシア主義を唱道する。なかでも今日まで旺盛に活動しているのが、アレクサンドル・ドゥーギン(1962-)である。ソ連のオカルト／ファシスト・サークル出身で、ペレストロイカ期にナショナリズム団体「パーミャチ」に加わった彼は、「ナショナル・ボリシェヴィキ党」の創設を経て、1997年の著書『地政学の基礎』で広く知られるようになった。地政学とユーラシア主義にもとづき、ロシアの外交政策を提言したこの著作でドゥーギンは、ロシアはユーラシアを核とするランドパワーの盟主として、彼が「大西洋主義」と呼ぶ欧米のシーパワーに対抗すべきであると説く。『地政学の基礎』は軍人を中心に広く読まれ、その後ドゥーギンは「ユーラシア党」や「国際ユーラシア主義運動」といった政治団体を組織していく<sup>2</sup>。また、社会運動と並行して、

2 『地政学の基礎』の内容は以下の書評を参照。黒岩幸子「アレクサンドル・ドゥーギン『地政学の基礎』ロシアの地政学的未来／空間をもって思考する」、『総合政策』第4巻第1号、2002年、93-101頁。ドゥーギンの経歴に関して、日本語で読める最もまとまった記述は、チャールズ・クローヴァー『ユーラシアニズム——ロシア新ナショナリズムの台頭』越智道雄訳、NHK出版、2016年。

ハイデガー論など夥しい哲学的著作も発表している。

ドゥーギンの活動はまた、ロシア国内にとどまらない国際性によっても際立っている。本稿後半では、ロシア周辺の権威主義的体制の国々にスポットをあてるが、ドゥーギンはそれ以外に、西欧やアメリカの新右翼とも活発に交流している。特に、イタリアのクラウディオ・ムッティやフランスのアラン・ド・ブノワといった新右翼とは、ソ連末期にすでに知りあい、協力関係を築いてきた<sup>3</sup>。ドイツでも近年、極右政党AfD(ドイツのための選択)を中心に、ドゥーギンへの注目が高まっているという<sup>4</sup>。これら西欧の新右翼は、アメリカと資本主義を批判し、ヨーロッパの伝統的アイデンティティを守ろうという主張で共通しており、ドゥーギンの「大西洋主義」批判と共鳴したのだといえよう。さらにドゥーギンは、トランプ政権を支えたといわれる、いわゆるオルトライトの中心人物たち、スティーヴ・バノンやリチャード・スペンサーからも支持され、スペンサーの妻であったニーナ・クプリヤノワがドゥーギンの著作を多数英訳し、スペンサー経営の出版社から刊行している。

こうしたドゥーギンの国際的活動は、2014年のウクライナ危機による国際的孤立以降、欧米の極右勢力に接近しているプーチン政権の動きを先取りするものだったといえる。ただしこれをもって、ドゥーギンがプーチン政権に影響を与えたとか、それを操っているなどとは断定できない。ドゥーギンが実際にどれほどの政治的影響力をもつかについては評価が分かれ、ジャーナリスティックな言説ではしばしば過大評価されるが、ピークは『地政学の基礎』刊行後数年で、現在では直接的な影響力はほとんどないだろうという見方が有力である<sup>5</sup>。このあとみていく、ユーラシア主義が広まった諸地域でも、ドゥーギンは活発に活動しているが、ロシアを盟主とする彼のユーラシア主義は警戒されることが多い。

### 3. ユーラシア主義の地域的展開

ここからは、権威主義的体制の地域・国におけるユーラシア主義の受容を、先行研究にもとづき概観していく。

#### 3-1. タタールスタン<sup>6</sup>

中央アジアに隣接したタタールstanは、ロシア連邦内で最大の自治共和国であり、シャイミエフ大統領の長期政権(1991-2010年)のもと、高い自治性を維持してきた。連邦政府への協力と自治のあいだでの巧みなバランス外交を支えるイデオロギーとなったのが、ユーラシア主義であった。2005年、首都カザン創設1000年にあたり建立されたグミリョフ像の碑銘、「私は生涯にわたりタタールを中傷から守ったロシア人である」は、ロシアとタタールの

3 See: Jean-Yves Camus, "A Long Lasting Friendship: Alexander Dugin and the French Radical Right," Marlene Laruelle, ed., *Eurasianism and the European Far Right: Reshaping the Europe-Russia Relationship*, Lanham and et al.: Lexington Books, 2015, pp. 79-96; Giovanni Savino, "From Evola to Dugin: The Neo-Eurasianist Connection in Italy," *ibid.*, pp. 97-124.

4 フォルカー・ヴァイス「ドイツの新右翼」長谷川晴生訳、新泉社、2019年、第8章。

5 ユーラシア主義研究の第一人者であるマルレーヌ・ラリュエールはそうした見方をとり、ウクライナ危機に際してアメリカがドゥーギンを個人制裁対象とした際にも、プーチン政権の意思決定プロセスに対する誤認だと批判している。Marlene Laruelle, "Scared of Putin's Shadow: In Sanctioning Dugin, Washington Got the Wrong Man," *Foreign Affairs*, March 25, 2015. <https://www.foreignaffairs.com/articles/russian-federation/2015-03-25/scared-putins-shadow> [last accessed on February 19, 2022]

6 本項の内容は以下にもとづく。Marlene Laruelle, *Russian Eurasianism: An Ideology of Empire*, trans. by Mischa Gabowitsch, Washington, D.C. and Baltimore: Woodrow Wilson Center Press and The Johns Hopkins UP, 2008, pp. 162-169; Mark Bassin, *The Gumilev Mystique: Biopolitics, Eurasianism, and the Construction of Community in Modern Russia*, Ithaca and London: Cornell UP, 2016, pp. 286-297; Victor Shnirel'man, "Useful Eurasianism, or How the Eurasian Idea Is Viewed from Tatarstan," Mark Bassin and Gonzalo Pozo, eds. *The Politics of Eurasianism: Identity, Popular Culture and Russia's Foreign Policy*, London and NY: Rowman & Littlefield, 2017, pp. 223-241.

紐帯にユーラシア主義が果たす役割を象徴的に示している。当初は、ロシアの近代化の父であり、ロシアとヨーロッパの結びつきを象徴するピョートル大帝の像が予定されていたが、反対運動が起こってグミリョフに変わったのだという。

ただし、タタールスタンでユーラシア主義が受け入れられるにあたっては、その素地となる別の思想が存在した。20世紀初頭からソ連の初期に広まった汎テュルク主義である。タタール人はユーラシア各地に散在するテュルク系諸民族の一つであり、汎テュルク主義はそれらテュルク系諸民族の統合を目指す。それは分離主義を内包しうするためソ連では抑圧されたが、シャイミエフはテュルクという民族をユーラシアという地域におきかえることによって、自主自立が分離主義にまで至らないようバランスを保ったのだといえよう。グミリョフを踏まえつつ、タタールの文化はロシア文化の不可欠の構成要素となっており、両者は不可分なのだとシャイミエフはいう。それは、タタールはロシアの一部だという意味ではなく、ロシアと中央アジア、さらに西洋と東洋の架け橋となる点で、タタールこそがユーラシアの中心であるということだ。

そのため、ロシアをユーラシアの盟主とするドゥーギンのユーラシア主義は、ロシアの帝国主義の偽装であるとして警戒された。イスラームをユーラシアの中核とみなす一方で、技術・経済面では欧米との融合を目指す志向においても、ドゥーギンの資本主義批判とは隔たりが大きい。

## 3-2. カザフスタン<sup>7</sup>

カザフスタンで1990-2019年の長きにわたり権威主義体制を敷いたナザルバエフは、ユーラシア主義をいち早く掲げた政治家であり、1994年にユーラシア連合構想を提唱、1996年にはグミリョフの名前を冠した「ユーラシア大学」を設立した。旧ソ連の一共和国から独立国家となったカザフスタンにおいて、ロシアとの連携がロシアへの従属になってはいけないという警戒はいつそう強く、タタールスタンの場合と同様、ユーラシア主義はみずからの主導のもとにロシアとの関係を強化するためのイデオロギーとなった。2000年のユーラシア経済共同体の結成は、ナザルバエフの尽力によるところが大きい。ドゥーギンは2004年にナザルバエフを称賛する著書を発表するなど、カザフスタンのユーラシア主義に食い込みを図ったが、やはりロシア中心主義であるとの懸念を受けている。

またタタールスタンと同様カザフスタンにも、ユーラシア主義を受け入れる素地として汎テュルク主義が存在した。それはロシアをも、文化的にはテュルク系の一部ないし派生とみなそうとする。たとえば、ソ連期のカザフ文学を代表する詩人オルジャス・スレイメノフ(1936-)の評論『アズとヤー』(1975)は、中世ロシア文学の古典『イーゴリ軍記』にテュルク語の影響を指摘し、ロシア文化は草創期からステップ遊牧民の文化と混淆していたのだと主張した。スレイメノフは父親が収容所でグミリョフと親交を結んでおり、『アズとヤー』もグミリョフの影響を受けている。

2000年代にナザルバエフはカザフ・ナショナリズムに傾斜し、彼の唱えるユーラシア主義も変質していく。90年代には、ロシアを通じたヨーロッパ化というヴィジョンも内包されていたが、2000年代にはカザフ／イスラーム中心主義が前面に出るようになる。ロシアは中央ユーラシアのステップ文明の周縁の一部であり、その主たる担い手であるテュルク系諸民族の中心がカザフスタンであるとされる。ユーラシアの多様性・混淆性を、カザフスタンは最も体現する

7 本項の内容は以下にもとづく。Laruelle, *Russian Eurasianism*, pp. 171-187; Bassin, *The Gumilev Mystique*, pp. 275-286.



というのだ。これはロシアのユーラシア主義がみずからをユーラシアの盟主とみなすのと同様であり、ユーラシア主義を、国外に対しては旧ソ連圏の結束を促す国際協調思想として使う一方、国内に対しては多民族統合のイデオロギーとして利用する、という構図も同じである。

### 3-3. トルコ<sup>8</sup>

トルコでは冷戦後に「ユーラシア」という言葉がよく使われるようになるが、タタールスタンやカザフスタンとは異なり、ロシアのユーラシア主義の直接的影響によるものではない。とはいえ、汎テュルク主義の復権に際して、民族的属性に縛られない「ユーラシア」という言葉が採用された、という流れは共通する。ただし、当初は汎テュルク主義の文脈で、旧ソ連から独立した中央アジア諸国やアゼルバイジャンとの連帯を訴えるものであったトルコのユーラシア主義は、さまざまな政治グループの主張にとりこまれるにつれ意味を多様化させる。いずれも欧米に対する批判・反発が基調ではあるものの、ケマル・アタテュルクによる近代化を支持するケマリストたちは、民族自治と国民国家を支える思想としてユーラシア主義を捉え、社会主義者は反資本主義の思想として、オスマン帝国の復活を理想とする新オスマン主義者は、かつてのオスマン帝国の領域をユーラシアとして捉えた。エルドアン大統領は新オスマン主義に近い立場といわれるが、ここでいうユーラシア主義は中東との連帯に主眼がある。

ユーラシアという言葉の流行にともない、ロシアのユーラシア主義、とりわけそのイデオログとしてのドゥーギンも注目されるようになった。2003年には『地政学の基礎』が大手出版社から翻訳されて版を重ねる。ドゥーギンもトルコでの活動に力を入れたが、『地政学の基礎』ではトルコがアメリカに従属した「大西洋主義」の一員として敵視されていたこともあり、広く支持を集めるには至らなかった。

### 3-4. ハンガリー<sup>9</sup>

ここまでみてきた各地域と同様、ハンガリーにもユーラシア主義を受け入れる素地があらかじめあった。20世紀前半に広まったトゥラン主義と呼ばれる思想で、「トゥラン」は(通例は中央ユーラシアの)テュルク系諸民族の居住地域を指す。トゥラン主義では、ハンガリー(特にその貴族階級)の起源はテュルク系にあるとされ、西洋と東洋の架け橋として位置づけられる。トゥラン主義はやがてイタリア・ファシズムに接近し、トルコの汎テュルク主義にも影響を与えたといわれるが、戦後は途絶えていた。

2010年代以降、オルバーン大統領の統治下で、極右政党とされる野党第一党のヨッピク(よりよいハンガリーのための運動)を中心に、ロシアのユーラシア主義が摂取される。ハンガリーでは社会主義時代の経験から反ロシア感情が強いが、オルバーン時代に高まっている反欧米感情とのあいだの揺れ動きが、ユーラシア主義の受容にもみてとれる。2013年に当時のヨッピク党首ヴォナ・ガーボルが、ドゥーギンの招聘によりモスクワ大学で講演した際には、

8 本項の内容は以下にもとづく。Laruelle, *Russian Eurasianism*, pp. 188-201; Vügar İmanbeyli, "Failed Exodus: Dugin's Network in Turkey," *Eurasianism and the European Far Right*, pp. 145-174; Emre Erşen, "Geopolitical Traditions in Turkey: Turkish Eurasianism," *The Politics of Eurasianism*, pp. 263-281.

9 本項の内容は以下にもとづく。Umut Korkut and Emel Akçali, "Deciphering Eurasianism in Hungary: Narratives, Networks, and Lifestyles," *Eurasianism and the European Far Right*, pp. 175-192; Balázs Trencsényi, "Strange Bedfellows: Turanism, Eurasianism, and the Hungarian Radical Right," *The Politics of Eurasianism*, pp. 243-261.

ロシアを資本主義に汚されていない「真のヨーロッパ」と呼んだ。これはユーラシア主義ではなく、ヨーロッパ新右翼に引きつけたロシア評といえる。ほかの地域と同様、ロシアをユーラシアの盟主とする見方に対しては警戒が強く、ユーラシアの西端に位置するハンガリーこそ、東洋と西洋の架け橋という役割を最もよく果たしうると主張される。しかし、移民排斥の一方でムスリムとの血縁性を唱えるなど、ヨーロッパとユーラシアのどちらにアイデンティティを求めるのかは定まっていない。

## 結びにかえて

以上、ユーラシア主義の地域的展開を手短に概観したが、いずれの例でも、テュルク系という歴史的起源がユーラシアという地域におきかえられることで、より融通無碍な統合・連携のイデオロギーとなっていた。ユーラシアに確たる定義はなく、多様性や混雑性、つまりは定義のしがたさこそが、ユーラシアの本質とされる。西洋近代への対抗思想として、西洋近代でないもの全般がユーラシアたりうるのである。しかしこれはユーラシア主義が、西洋近代的「でない」という否定的規定しかもたず、積極的内容を欠くという弱さも意味している。中身が空疎であるがゆえに、どの国・地域もみずからをユーラシアの中心と唱えることができる。こうした対抗性・否定性によってしか満たされないアイデンティティ政治のいきつく先として、今日のロシア外交を理解することもできるだろう。

ユーラシア主義の歴史的展開のなかには、初期ユーラシア主義者であるトルベツコイやヤコブソンの構造言語学など、豊かな内容をもつ思想との結びつきも少なくない。その内容自体を問いなおし、それによりユーラシア主義を空疎な政治的利用から遠ざけることを、思想史研究は目指すべきであろう。



